一 反省の記 一

思えば発展の年であった。各分校を統一して新しく一つの神戸大学E.S.S.として発足して第一年目。1つのテストではあったがまがりなりにも成功したと思う。想出は多い。どの活動をとりあげても我々のそして全部員のファイトがよみがえって来る。デイベイトの全国優勝。夏の合宿の大成功。春の合宿の下津井での一週間。夏の第1回グランドユニオンクラブ等々。我々スタッフ一同が一丸となり又後輩諸君と一緒に苦労したにまものであろう。四年生の後輩も大変かった。感謝と共に誇りでもある。

一方反省する所も大きい。第一にこの「ファイル」の作成がおくれた点である。その点内水君達今の三年生に申しわけない。E.S.S.活動を主に各dept.グループが分担した為にレポートやdataを残す事が徹底しなかった。故にこの様なファイルになった事は残念だ。International Conferenceが思う様に行かなかった。デイベイトの為に秋にはりきった事、その為に外人が少なかった。又インコン自体の目的もまがりかどに来ているのではないか。第三に大きな行事を行う場合一部門の長と部長との間の会議形式にはしない各dept.グループ(部長も含めての)間の会議がなされなかった点である。これは新組織の発足第一年から得たにがい経験だ。これからはE.S.S.全体の活動を持つ時に限らず少くとも月に一回は全dept.グループが集って話しあう様に。話題がなければE.S.S.自体の目的の反省でもよし。これまでの活動の反省でもよし、又これからの計画を話しあってもよい。

その他反省は多いが列挙して行こう。E.S.S.の発展とは何か。部員数の増加もある。活動内容の充実もある。しかしあまり多くの活動をやりすぎて部員が不平を持つ様ではかえって効果だ。対外的発展もある。デイベイト、オラトリー、スピーチコンテスト、ドラマコンテストなどに勝ち、負けもあった。それだけではない。あらゆる機会に神戸大学E.S.S.は立派な部だ。すばらしい部だ。あそこには勝てんという潜在意識を他校にうえつける事だ。交歓会でのディスカッションも遊び半分ではなく真剣に問題にアプローチするべきだ。神大E.S.S.の行く所、おそれられし、尊敬され、好感を持たれる様努力せよ。吾々は内外共にそれを行い大きな成績をあげた。デイベイト、交歓会にしろ学内でのdiscussionにしろ、与えられたものを過大評価せず、それに真剣にぶつかる事、それが秘訣ではなかろか。

学内的にはやはり他の文化部との競争だ。学内にも「E.S.S.ここに有り」を示せ。他のクラブ、自治会、新聞会、そして一般学生は味方であり敵にもなる。要は売込みだ。予算委員会、その他の会合に積極的に出席すべきだ。「部室」の確保。これこそ、ここ数年間の念願だ。学校当局、特に学生課には事ある毎に働きかける様に。

・ESSの委員こそESS発展の牽引車だ。主なメンバーに元気がなければ他の部員も元気がない。そしてESSは成長する。三年生の2・3月はまだ何も分らない。時には迷いもある。その時こそ四年のメンバーが後押しをするのだ。迷いがあってこそ新しい成長が来る。もし迷いがあれば先輩を思い出せ。努力し迷い、考え、ぶつかり合い又努力した先輩が諸君を見守っている。ESSにおいて努力し働きかけよ。必ず努力する者にはESSという組織が数倍の実を実しくれる。きっと「ESSに居てよかった。有難うESS」と云える日が必ず来る。

伝統は大切だがその後ばかりはいりない、いつも新しいアイデアをもって努力せよ。これがESSにとっても諸君にとっても有益なのだ。"ESS is what you make it"なのである。新しいアイデアに富み元気があり、若さの溢れる所人発展がある。

一年・二年の部員は上級生にうえている。上級生・下級生間の交りこそ大学生活に於るクラブ生活の意義ある所である。よく遊びよく学べクラブ生活に於ては上級生の考え方・生活態度・人柄が非常に下級生に影響する。

常にESSとして多くの外人とコンタクトを持つ事。そうすればいざという時に外人を集める事が出来るから。インドネシアの経験から痛切に感じた。

各部員がESSの一員である事を忘れずに。合宿では特にそれが云える。その他個人的行動をする場合も、どこかで人ともした一言が(悪く)他校に対する全ESSの評価に繋がっている事があるから。

ESSは良い部だ。これは我々9回生全員の一致した考えだ。我々一同ESSに対し先輩に対し(直接お世話になった8回生、7回生、6回生)、又9回生仲間に、そして後輩の諸君に感謝している。有難うESS!

(T.S. 記)

1960-03-31　九回生記録係　清水昭夫記